

座位保持機能が不十分な児に対する ADL 改善を目的としたシーティング

理学療法士 荒川 依子

キーワード：キャスパーアプローチ・ADL・快適性

### 【はじめに】

頭部・体幹の緊張が低く、十分な座位保持機能を持たない児に対してシーティングを検討する際、脊柱-骨盤の生理的彎曲を作り出す姿勢は身体面・環境面からみて困難なことがある<sup>1)</sup>。

今回はそのような児に対して、村上<sup>2)</sup>が推奨するキャスパーアプローチ(以下 Ca)の概念を取り入れ、ADL の改善を目的とした車椅子上のシーティングを検討したので報告する。

### 【症例紹介】

A さん CP 女児 14 歳 GMFCS : level V

H19.4 月より当センター入所。床上移動、自力座位保持可能。体幹・股関節周囲の低筋緊張を認める。座位には努力を要し、骨盤後傾位で体幹が円背となり、頭部挙上は頸部伸展で代償するため後頸部の短縮、肩甲骨挙上位、肩関節外旋制限を認める。

ADL：食事摂取、車椅子駆動可能。移乗軽介助。

入所初期の車椅子は座角 95° 設定。背シートにより脊柱が常に前方に押し出され、円背の不良姿勢となりやすく、食事効率・車椅子駆動効率の低下などが指摘された。また、成長に伴う頸部・腰部への負担も心配された。家族と相談し、車椅子を新しく作製することにした。

### 【経過】

まず、姿勢改善を目的として、脊柱の生理的彎曲をイメージした肩ベルト・腰椎サポートをつけ常に骨盤・体幹が起きている状態を提供した。しかし、体幹・肩関節の自由度が制限され、駆動効率の低下、リーチ範囲の狭小などデメリットを生じた。頸部の前方突出・頸部周囲の過剰努力が目立ち、本人の疲労の訴えもあった。

そのため、次に姿勢の改善と共に ADL に必要な自由度を確保した快適な座位を検討し直すことにした。

Ca 概念を基に、移乗に支障がない程度に座面全体

を後方傾斜させ、仙骨が倒れすぎない位置で安定する場所を作り、さらに胸郭が骨盤よりも後方に位置するようにした。本人の胸郭の丸みに合わせた背面に体を預け、矢状面にて肩甲骨-頭部が垂直に起きやすくなるよう設定した。

### 【結果】

身体が常に前方へ押し出されることなく、肩・頸部周囲の過緊張も減少した。肩ベルトの必要もなくなり、食事姿勢改善、駆動効率向上が見られた。また、病棟からトイレにも間に合うようになったとの報告があった。身体を背もたれに預け、休息しながらテレビを見ることができるようになった。

### 【考察】

車椅子は単なる移動手段ではなく、日常を過ごす場でもある。特に頭部・体幹の保持機能が低い児にとっては生理的彎曲を作り出す理想的なよい姿勢だけではなく、生活場面に応じて休息も含めた快適性の提供も必要であると実感した。重力に抗するための過剰努力を必要としない座位姿勢は ADL 面の改善とともに腰痛や二次的な変形の予防にもつながると考える。

今後はこの Ca による変形予防の程度も含め、客観的な評価・検討もしていく必要がある。

参考文献：

- 1) 伊藤利之他 車いす・シーティングーその理解と実践ー。2005. はる書房
- 2) 村上潤 キャスパーアプローチ講習会資料集



※2009 年全国肢体不自由児療育研究大会にて発表